

ネット社会の光と影を高校生が自ら考える

米 田 謙 三（羽衣学園高等学校）

1. はじめに

平成 21 年 4 月から施行された「青少年インターネット環境整備法」に基づき、青少年が安心・安全にインターネットを利用するための環境整備が始まった。また、急速に普及を始めたスマートフォンや新しい ICT（情報通信技術）サービスにおいて、青少年が健全に ICT を利活用できるように育成するため、青少年への指導に加え、保護者や教職員への「情報モラル教育」の啓発活動が重要視されるようになった。しかし、ネットに関する問題は減どころか増える一方のように思える。特に SNS に関する書き込みの問題が各校で問題となっていることが多い。現在、青少年におけるソーシャルメディアの利用が拡大している状況で、その利用の容易さ簡便さにより、影響やリスクを考えることなく、安易な発言や画像の投稿、プライバシーに係わる情報等を発信し、ネット上での炎上やいじめ・犯罪被害につながる事例も多数ある。また、ネットでの炎上トラブルをきっかけに、現在、企業のみならず大学でも、ソーシャルメディアガイドラインを策定し、ソーシャルメディアの利用を通じてトラブルに巻き込まれることがないよう注意喚起を行っている。しかし、高校でのガイドライン策定は、まだ一部の先進的な高校に限られており、ソーシャルメディア利用に伴うトラブルが高校以下の低年齢層に拡大している状況にある。ソーシャルメディアの利用は、常に教師よりも生徒側が先行するだけに、生徒指導が重要となり、教師がソーシャルメディアを利用するかどうか、詳しいかどうかに関係なく、生徒に対して、教職員全員でガイドラインに沿った注意喚起を行う必要がある。

2. 研究の目的

本校においても、適切なネット利用、また、生徒の健全育成の側面からも、ソーシャルメディアガイドラインを策定していくこととする。また、ネット問題を減らすには、高校生が家庭や学校で如何に取組むべきかを先進的な取組で提案することが一番の成果だと考える。高校生は、インターネットやスマホ（携帯電話）について、既に高いリテラシーを獲得している生徒もいる一方で、未だスマホを所持していない生徒も少ないがいる。また違う端末を扱う生徒も増えている。そこで生徒たちがお互いに話し合う場面を設定してそれぞれの立場から共通の問題点や課題、将来性を検討することにより、双方の生徒が新しい気づきを得、今後、ネットの問題についてより深い思慮が得られるきっかけとさせたい。また、学んだことを実践する交流・プロジェクト学習を実践することも今回一つの目的にしたい。具体的には、生徒たちには上記のソーシャルメディアガイドラインの策定に協力してもらうこととスマホ活用への提言を作成させる。この実践を通して生徒たちが、ネットワークリテラシーを育み、主体的に学ぶ意欲や問題発見・解決能力、情報活用の実践力を習得させる。提言に関しては自分たちの考えをもとに企業や地域の方からのサポートや協力もいただき、新しい発見の一助ともしたい。また教員のみならず生徒たちも、企業の方の考えや他校の生徒、先生のネットに関する意見を聞きさらに互いに視野を広げ新しい考えをもつことができ、高校生自らが、これからの夢のある社会へいじめや誹謗中傷、安易な書き込み、依存などの影の部分を理解し、スマホやネットワークをいか

に光として活用するかという視点を持った立場で中高生や保護者に提言できるようにさせたい。今回海外の学校（特にアジア圏）との交流プロジェクトも実施したいと考えているので具体的に海外でのネットの依存やいじめの問題などに関して意見交換をして内容を深めることもしたい。

特にいじめに関しては、筑波大学の Hand in hand(http://www.slis.tsukuba.ac.jp/hand_in_hand/)のサイトを活用し特にいじめにつながる対人トラブルの問題を予防するための教材を配布して取り組むこととする。



写真1 島根県の公立高校とネットでモラル学習



写真2 ロボット、DeNA コラボ授業

3. 研究の方法

本プロジェクトの方法は、下記の7つの項目でどの実践も実施した。

(1) 導入プロジェクトの概要についての説明を実施する。(2) ウェブ検索実習。(3) 掲示板や SNS の使い方の理解。(4) スクールガイドライン作成。(5) 海外・国内の学生とのモラルについての意見交換・発表ネット問題についてのいい点・悪い点を意見交換させる。またグループで意見交換（口頭や掲示板などを活用）させる。最終的に自分の意見をまとめさせる。(6) 国内学生との提案授業の実施教育や貧困や環境などのテーマに関してメールや掲示板や TV 会議システムを利用して意見交換させる。そして各国で実施する。(7) 意見発表・相互評価 TV 会議システムなどを利用して生徒（海外含む）や専門家と授業や意見交換交流をする。

4・5. 研究の内容・経過

取り組み1 海外とのコラボ企画参加校（台湾、マレーシア、インドネシア、タイ）高校生対象教科英語、情報。

4～7月 参加国教員との打ち合わせ（オンライン会議）。電子掲示板（pukiwiki）の構築と、参加教員、生徒による予備試用 SNS（特に Facebook）をたちあげる。交流開始、電子掲示板使用。

アンケート。参加教員、生徒間で、アンケート集計結果（PowerPoint ファイル）の共有。

ディスカッションテーマの決定。いじめに関しては必ず項目に入れる。

ビデオ会議実施（7月～8月）。参加校訪問。目的は、フィードバック収集（7月～8月）。

9月～12月 アンケート、ディスカッションテーマの決定。電子掲示板の書き込みをもとに、ディスカッションテーマ決定と意見交流実施。

ビデオ会議。海外協力校訪問報告会（face-to-face or online による会議）実施。学校外で生徒同士がスマートフォンなどを活用して実施。

大阪私学教育情報化研究発表大会などで報告。台湾の高校とスマートフォンの問題点からスマート

な使い方をテーマに協働プレゼン作成（英語）高雄で発表。

取り組み2 本校での取り組み計画ガイドライン作成。

4月～6月 学校－生徒が一体となった検討チームを立ち上げる。運用にあたっては、学校・生徒・保護者が一体となった実効性のあるルール作りを行う。検討チームは、生徒代表メンバー15名程度バックアップ（教員・保護者・企業）。生徒を中心とした検討チームに対して、教師・保護者がバックアップする形で作成を進める。

9月～12月 ガイドライン作成。企業や省庁に意見をいただき、ブラッシュアップ。結果総務省の優秀事例に選ばれる。

取り組み3 校内での実践授業「小学生や中学生にモラルを教える」。

4月～12月 ターゲットの理解と訴訟内容の検討(1時間)。10人前後のグループをつくる。携帯を持ち始めた時期を話し合う。どの様に使っていたかを話し合う。文科省やベネッセなどの携帯所持率の統計などを用いて話し合いをグループ内でさせる。

SNSの理解(2時間)。ネット事業者の方などの説明をオンデマンドで視聴する。ネット事業者の説明を参考に話し合う（グループで）。事業者の説明の時はメモを取らせる。話し合いの時は付箋などを使用させる。

偽SNSの体験(1時間)。偽SNSで被害に遭うことを体験する。いじめのこともテーマに入れる（グループで）。騙されるストーリーを作っておく。また、騙される側と騙す側を経験させる。

企画の検討(3時間)。広告業界の方のアドバイスをオンデマンドで視聴する。伝えたい内容を考える（グループで）。産学連携授業としてプログラミングの授業とモラルの授業を実施していただく。

企画の発表(1時間)。各グループの企画をプレゼンする。プレゼン後、他のグループの意見を参考に企画を練り直す。ネット上の連絡掲示板に企画をアップして、他のクラスや他校の生徒に意見を書いてもらう。

授業方法の検討1(1時間)。各グループで先生になったら、どんな授業をしたいかを話し合わせる。話し合った結果を、ネット上の連絡掲示板にアップして、他のクラスや他校の生徒に意見をもらう。

キャッチコピーの検討(1時間)。広告業界の方のキャッチコピーについての説明をオンデマンドで視聴する。授業のキャッチコピーを考える。決定したキャッチコピーを連絡用掲示板にアップする。いろいろCMを参考にして考えさせる。またユネスコの企画のリーフレット作成などにも取り組ませる。内容の検討(2時間)。企画を元に、各グループで教える授業の内容を考える。各グループの授業内容を発表する。発表後、他のグループの意見を参考に授業内容を参考に練り直す。

内容の決定(1時間)。企画書をつくる。インターネット上のサービスをリアルに体験できる授業を考えさせる。実際12月に大阪府のいくつかの中学校に出前講座を実施する。寝屋川市立第四中学校では全個生徒約300名に対して依存やスマートな使い方をテーマに講演会実施。

授業において2 4月～12月

http://www.slis.tsukuba.ac.jp/hand_in_hand/about/を活用した授業を実施する。具体的にいじめにつながる人が多い下記の授業を実施する。

「あなたのSNSの設定、大丈夫？」「その情報、誰が見てる？」「既読スルー」って悪いこと？」SNSの「既読」機能は、返信しなくても読んだことが相手に伝わる便利な機能だが、最近は「読んだのに返信をしない」＝「既読スルー」の問題が浮かび上がってきている。これがいじめにつながる場合も出てきた。ネット上ではどうしても伝わりにくいことがあるので、トラブルを防ぐためには、実

際のコミュニケーションが必要であること、相手の立場を理解することが必要であることを学ばせる。

6. 研究の成果と今後の課題

現在、企業のみならず大学でも、ソーシャルメディアガイドラインを策定し、ソーシャルメディアの利用を通じてトラブルに巻き込まれることがないように注意喚起を行っている。しかし、高校でのガイドライン策定は、まだ一部の先進的な高校に限られており、ソーシャルメディア利用に伴うトラブルが高校以下の低年齢層に拡大している状況にある。ソーシャルメディアの利用は、常に教師よりも生徒側が先行するだけに、生徒指導が重要となり、教師がソーシャルメディアを利用するかどうか、詳しいかどうかに関係なく、生徒に対して、教職員全員でガイドラインに沿った注意喚起を行う必要があるため、本校においても、適切なネット利用、また、生徒の健全育成の側面からも、ソーシャルメディアガイドラインを策定していくこととしたい。また、ネット問題を減らすには、高校生が家庭や学校で如何に取り組むべきかを先進的な取組で提案することが一番の成果だと考える。高校生は、インターネットやスマホ（携帯電話）について、既に高いリテラシーを獲得している生徒もいる一方で、未だスマホを所持していない生徒も少ないがいる。また違う端末を扱う生徒も増えている。そこで生徒たちがお互いに話し合う場面を設定してそれぞれの立場から共通の問題点や課題、将来性を検討することにより、双方の生徒が新しい気づきを得、今後、ネットの問題についてより深い思慮が得られるきっかけとさせたい。また、学んだことを実践する交流・プロジェクト学習を実践することも今回一つの目的にしたい。具体的には、生徒たちには上記のソーシャルメディアガイドラインの策定に協力してもらうこととスマホ活用への提言を作成させたい。この実践を通して生徒たちが、ネットワークリテラシーを育み、主体的に学ぶ意欲や問題発見・解決能力、情報活用の実践力を習得させたい。提言に関しては自分たちの考えをもとに企業や地域の方からのサポートや協力もいただき、新しい発見の一助ともしたい。また教員のみならず生徒たちも、企業の方の考えや他校の生徒、先生のネットに関する意見を聞きさらに互いに視野を広げ新しい考えをもつことができ、高校生自らが、これからの夢のある社会へいじめや誹謗中傷、安易な書き込み、依存などの影の部分を理解し、スマホやネットワークをいかに光として活用するかという視点を持った立場で中高生や保護者に提言できるようにさせたい。今回海外の学校（特にアジア圏）との交流プロジェクトも実施したいと考えているので具体的に海外でのネットの依存やいじめの問題などに関して意見交換をして内容を深めることもしたい。